

平成26年度豆類需給安定会議・ 平成26年度豆類産地懇談会・ 第62回豆類生産流通懇談会の開催

全国豆類振興会

今年も豆類の生産・流通・加工に関係する者が一堂に会し、主産地十勝の作況を視察するとともに、今後の需給状況に関する情報・意見を交換し、道産豆類に対する理解をより一層深め、豆類の生産・流通の安定と消費の拡大を図ることを目的として、(公社)北海道豆類価格安定基金協会、全国豆類振興会及び北海道豆類振興会の3者が主催して、9月4日(木)北海道十勝管内音更町で開催されました。生産・流通・加工等業界関係者、行政・試験研究等の方々70数名が参加されました。

午前中は、作況視察で十勝農業試験場において本年の生育状況、新品種の育成状況等について説明を受けました。

その後、河西郡中札内において、小豆・いんげんのほ場を見せていただき、順調な生育状況でした。

午後の懇談会は、全国豆類振興会 畑中会長から主催者挨拶の後、来賓として農林水産省生産局穀物課の松下課長補佐がご挨拶を兼ねて豆類をめぐる最近の事情を報告されたほか、(公財)日本豆類協会の斎藤常務理事からご挨拶をいただきました。

〈第1部 話題提供〉

話題提供では、豆類の優良経営に学ぶ～全国豆類経営改善共励会出品材から～2人の受賞者の経営状況の報告があった。

最初の報告者は、「土作りと輪作体系の確立により『エリモショウズ』を安定生産」と題して、中川郡豊頃町 山本達美氏から報告があった。

山本氏は、平成22年度に第38回全国豆類経営改善共励会「小豆・いんげん・落花生等の部」で農林水産大臣賞を、第49回農林水産祭では内閣総理大臣賞(農産部門:小豆)を夫婦連名で受賞している。

山本氏の経営は、豆類35.7haうち小豆16.3ha、いんげん12.8haで、ほかに小麦、てん菜、馬鈴しょなどで合計81.7haで経営をしている。

経営の特色として、次の取り組みを説明していただいた。

(1-①) 土作りへの取り組み

・25年前より酪農家から堆肥を購入し地力向上や減肥を進めている。毎年耕作面積のおおよそ80%のほ場に3トン/10アールを目処に投入。

・耕作地は「低地土」「泥炭土」「火山性土」

と性質の異なる土壌タイプのため土壌診断を実施し、ほ場ごとに施肥量を工夫。

・畑のpHには注意し作物ごとに適正なpHとなるように石灰資材を散布。

(1-②) 排水対策への取り組み

・明暗渠整備は7~10年間隔で計画的施工。

・毎年全てのほ場に心土破碎を実施。平成21年は大型トラクタの導入に合わせ、ハーフソイラを導入。

・表土の排水性改善に向けて平成20年より十勝川掘削事業による泥炭土壌の客土を実施。

・複合作業機パラソイラの活用と馬鈴しょ、てん菜作付直後の畝間サブソイラ施工により「粘りの改善」「排水改善」。

(2) 輪作体系についての考え方

・小麦前作に馬鈴しょが来るように10年前より加工用馬鈴しょを導入した（でん粉原料用馬鈴しょの早掘りによる減収を回避及び金時類の収穫時期が安定）。

・基本的に4~6年の輪作体系を確立し小豆・金時作付は5~7年の輪作を確保（落葉病・茎疫病など小豆土壌病害回避）。

・長期輪作を確保するため20年前より酪農家との交換耕作を進める（山本農場にとっては、長期の輪作体系を確立できる。酪農家にとってもデントコーン畑の連作障害の回避につながるなど、双方にメリットがある）。

(3) 基本技術の励行と新技術導入

①作業機の効率利用

複合作業機パラソイラをパワーハローもしくはロータリーハローの全部に装着し、耕盤破碎と碎土整地の同時作業を実施し、

作業の効率化を実現。

②馬鈴しょとてん菜の作付直後に畝間サブソイラを入れるなど排水性の改善を行って生育不良を防止し、作業の軽減と労働の分散。

③環境への配慮

・平成15年からTeeJetスプレーヤの自動制御システム装置とTeeJetノズルを使用して、高能率散布ができ、農薬ドリフトを軽減。また、低圧少量散布ができるため、農薬使用量が減り、コストが低減。

(4) 小豆「エリモショウズ」栽培

・種子は毎年更新（十勝農協連で根粒菌加工）。

・畝巾66cm×株間14cmを2~3粒播き（金時は18cmを2粒播き）の密植栽培にし、倒伏の軽減と稔実粒の増加により、製品化率、品質、収量の向上。

・「農業技術情報」を参考にした適期作業。

・欠株を無くする丁寧な「播種作業」。

・土作りと土壌診断による適正pH管理と施肥。

・各ほ場の土壌条件と生育状況の把握。

これらの取り組みにより、稔実粒増加・歩留率向上・倒伏軽減し、高品質・増収を図っている。

次の報告者は、「虎豆を導入した輪作体系により畑作物の高収量を実現」登呂郡訓子府町の石川修氏の経営について、網走農業改良普及センター専門普及指導員荒木英晴氏から報告があった。

(1) 経営の状況

・近隣の農地を買い入れながら規模を広げ、19.5haまで拡大（平成26年に25.1haまで更に拡大）。

・畑作専業農家としては経営規模が小さいため、収益性の高い高級菜豆を導入。

・種子用馬鈴しょ生産農家として、地域へ高品質いもを供給。

・適正な輪作体系の確立、有機物施用による土づくり、土壌分析によるコスト削減を実施。

(2) 豆類導入のメリット

・豆作後に作付けされる馬鈴しょの品質が向上（食味向上・そうか病の減少など）。

・ジャガイモシストセンチュウの発生リスクの軽減。

・経営リスクの分散

低温性作物：小麦、てんさい、馬鈴しょ

高温性作物：豆類

→近年の異常気象〈特に高温〉により収量が不安定。

(3) 取り組み

・豆類を導入した4年輪作で高収量を実現

・適正な栽培本数で収量・品質向上

・気象変動にあわせた柔軟な技術対応

・省力化の取り組み

・地域への技術波及

・積極的な消費PR

これらの取り組みについて、詳細な報告がありました。

<第2部 意見交換>

第2部では意見交換のテーマは、「道産豆類の安定的な需給の確保のために」をテ

マに意見交換を公益社団法人北海道農業改良普及協会黒澤不二男会長のコーディネーターのもとに進められました。

その中での情勢報告では、「産地情勢」として、ホクレン農業協同組合連合会 雑穀課長 長谷川幸男氏から平成26年産豆類の生育状況と生産見通しについて報告をしていただきました。また、「海外情勢」として、雑穀輸入協議会 副理事長 甘糟 薫一郎氏から海外の雑豆情勢について報告がありました。

さらに、「試験研究動向」につきましては、十勝農業試験場 主査 佐藤 仁氏から豆類の品種の育成状況等について報告がありました。

その後、消費の維持確保、試験研究など課題に対し活発な意見交換をし、懇談会を終了しました。



十勝農業試験場の視察



懇談会